

NINJAL国際シンポジウム
現場を支える日本語教育研究
＜第三分科会＞

「評価する:コースデザインは
評価にどんな影響を与えるのか」

伊東 祐郎
(東京外国語大学／大学院国際日本学研究院)
2016年1月23日

本日の流れ

1. 最近の日本語教育を取り巻く環境
2. 日本語教育の標準化・基準化
3. 日本語学習の多様化と日本語能力観の変化
4. これからの日本語教育に期待されているもの
目指すべきもの: コースデザイン = 評価

世界における留学生数の推移

- 過去30年間で、全世界の留学生数は、大幅に増加。
- 1975年の80万人⇒2009年370万人
(4倍以上増)
- 留学生獲得競争政策⇒重要な国家政策
- 優秀な留学生の獲得が国益につながる
- 日本語教育の質が問われる
- 学生の移動に伴うシステムの整備

グローバル化 (=globalization) とは

- これまで存在した国家、地域などタテ割りの境界を超え、地球が1つの単位になる変動の趨勢(すうせい)や過程。(知恵蔵)
- 地球を1つの塊として、個々の国や大陸、民族の集まりとしてではなく、この地球という星を1つと見る世界観。
- 国民経済が国際経済システムの中に包み込まれ、区別された独立の単位。生産は、超国家的な企業による世界的なものとなり、企業は国籍を消失し、一国の政府がこれを規制することは困難。

教育のグローバル化

- **CEFR** (The Common European Framework of References for Language)
- **ALTE** (The Association of Language Testers in Europe) Framework
- **ACTFL** (American Council for the Teaching of Foreign Language) Proficiency Guidelines
- **CLB** (Center for Canadian Language Benchmarks)

学士力 (平成20年中央教育審議会答申)

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野の基本的知識、
知識体系の意味と自己の存在を理解する。

(1) 多文化・異文化に関する知識の理解

(2) 人類の文化、社会と自然に関する
知識の理解

学士力 (2/3)

2. 汎用的技能

知的活動・職業生活・社会生活で必要な技能

(1)コミュニケーション・スキル

(2)数量的スキル

(3)情報リテラシー

(4)論理的思考力

(5)問題解決力

学士力 (3/3)

3. 態度・志向性

(1)自己管理力

(2)チームワーク、リーダーシップ

(3)倫理観

(4)市民としての社会的責任

(5)生涯学習力

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、
新たな課題を解決する能力

日本語教育が秘めた教育力

- 異文化理解能力(寛容性)
- 異文化間コミュニケーション力
(コミュニケーション力)
- 多言語・多文化への適応能力(柔軟性)
- ネットワーキング(情報収集・活用技能)
- 課題解決能力(問題解決・創造技能)



「グローバル社会で生きる人間力」

コミュニケーション教育の実態

(1) 情報伝達的コミュニケーション

: 事柄の理解に重点がおかれたもの

(2) 実在的コミュニケーション

: 心の理解に重点がおかれたもの

Bloom's Taxonomy

- ベンジャミン・ブルーム(1956)が
“Taxonomy of educational objectives”のなかで提
唱した「教育目標のタキソノミー(分類学)」
- 目標の能力面を階層的に整理したもの
- 上位のカテゴリーは下位のカテゴリーより複雑で、
抽象的あるいは内在化された能力となっている

Bloom's TaxonomyとEvaluation

- 教育目標の分類は、授業や教育評価、学力の到達基準 (performance standard) を構造化する
- 授業や教育の方向付け (達成目標) を明確化
- 授業設計や目標及び授業分析が可能
- 教育・授業目標への到達過程を評価する
 - 診断的評価 (diagnostic evaluation)
 - 形成的評価 (formative evaluation)
 - 総括的評価 (summative evaluation)

3次元(領域)から構成される 教育目標＝授業目標

- **認知的領域**(cognitive domain)
知識の再生や知的技能の発達にかかわる。
- **情意的領域**(affective domain)
興味・態度・価値観にかかわる。受容(注意)
→反応(興味)→価値付け(態度)→価値の組織付け(哲学)→個性化(スタイル)
- **精神運動的領域**(psychomotor domain)
運動技能や操作技能にかかわる。

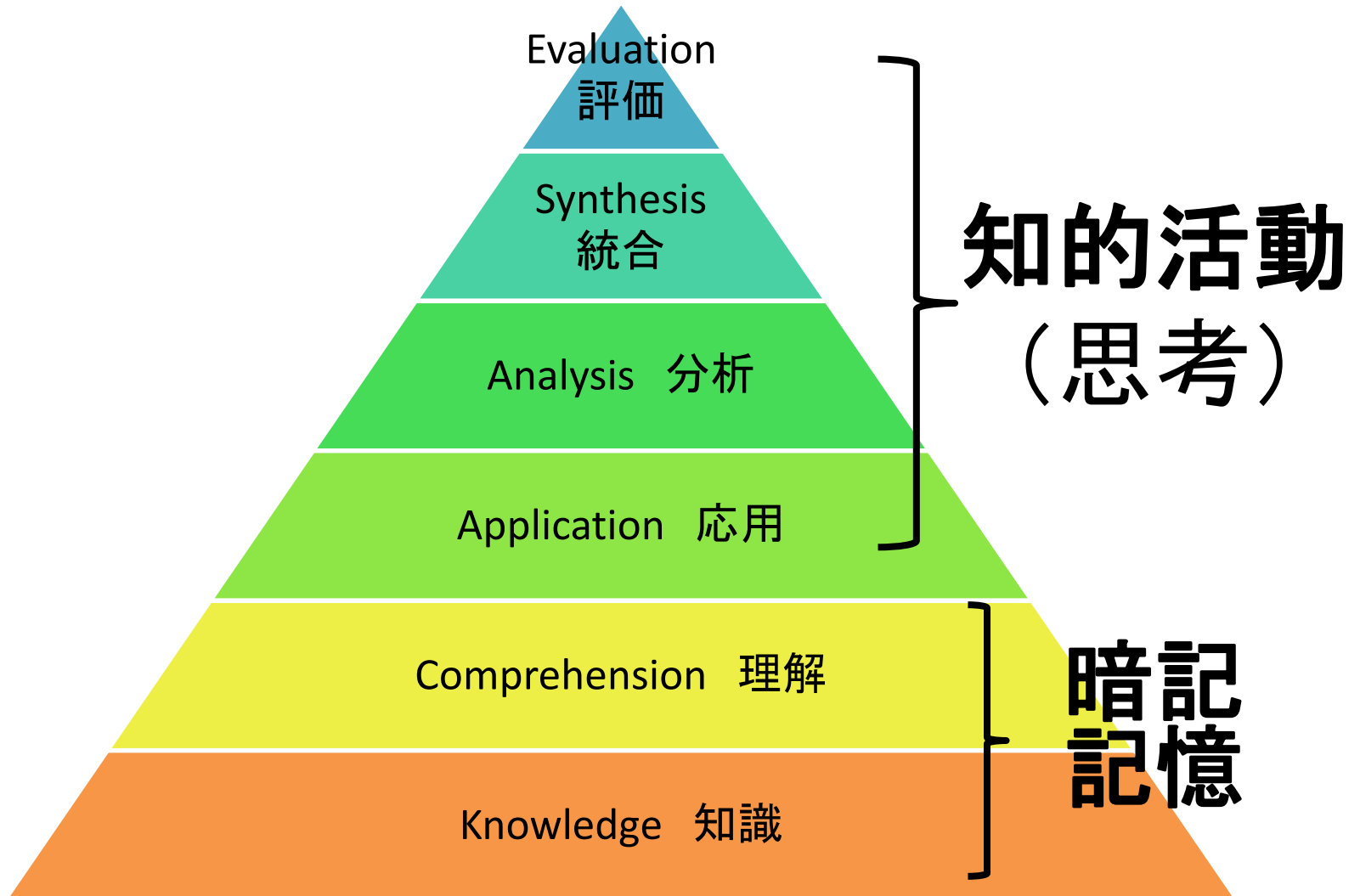
認知的領域 (cognitive domain)

- 組織的原理は精神的操作の複雑化。
- 目標は、知識→理解→応用→分析→評価→創造というかたちで高次化していく。



Bloom's Taxonomy

Bloom's Taxonomy



1. Knowledge 知識

知識(Knowledge): 与えられた客観的な知識・情報を暗記して、必要に応じて認識、想起できるようにする。

■ 質問の例

- “漢字「発足」の読み方は何ですか。”
- “「買います」のテ形は何ですか。”
- “「冷静な人」とはどのような人ですか。”

2. Comprehension 理解

理解力(comprehension): 与えられた客観的な知識・情報の内容や論理の展開を把握して、必要に応じて知識を活用できるようにする。

■ 質問の例

- “「真冬日」とはどのような日のことですか。”
- “この文の主題(テーマ)は何ですか。”
- “この人は何を買いますか。”

3. Application 応用

応用力(application): 学習した基本的な知識・理論・情報を活用して、直面した新たな課題や問題を解決できるようにする。

■ 質問の例

- “地震から身を守るためには、どんな方法がありますか。”
- “貧困をなくすために、どのようなことをしたらいいですか。”

4. Analysis 分析

分析力(analysis): 問題状況や観察した事象を『複数の構成要素』に区分して、その傾向・特徴・確率などを分析したり関連づけたりする。

■ 質問の例

- “言葉がわからない外国人が住みやすい街にするためには何をしたらよいですか。”
- “外国語を学ぶことに対してよい点を3つ挙げなさい。また、その理由を述べなさい。”

5. Synthesis 統合

統合力(synthesis): 自分の学習経験や考えを統合したり、組み合わせたりして、現実世界で直面する問題・危機に対して新たなものを作り出せるようにする。

■ 質問の例

- “日本の会社では、社内の公用語を英語にしようという考えがあります。長所と短所を挙げなさい。また、その理由を述べなさい。”
- “平和とはどんな状況のことをいいますか。それは実現可能なことですか。”

6. Evaluation 評価

評価力(evaluation):『複数の構成要素』を適切に統合した結果として、新たな理論で独自の価値判断をしたり、批判したり、伝達したりする。

■質問の例

- “夫婦別姓についてどう思いますか。”
- “生活から出るゴミを減らすにはどうしたらいいですか。一番いい方法を考えてください。”

教育目標をどのように設定するか

- 教育目標を「明確化」する
（＝どんな人材を育成していくのか）
- 学習者の「行動」に基づいて目標を設定する
（＝何を学んでほしいのか）
- 学習者の「目標行動」が評価できる条件・方法を検討しておく
- 目標が達成されたかどうかを判断する基準を準備しておく

行動目標
Can-do
Statements

```
graph TD; A[行動目標 Can-do Statements] --- B[ ]; B --- C[授業・指導]; B --- D[教材・教具]; B --- E[測定・評価];
```

授業・指導

教材・教具

測定・評価

評価における最近の動向

- 行動主義／心理測定アプローチ
 - 信頼性を優先するために、妥当性を犠牲？
 - 知識面の測定に偏りがち？
- 社会／文化アプローチ
 - 学習を個人的なものとして捉える
 - 学習を他者との相互関係として捉える
 - 学習を社会的なものとして捉える

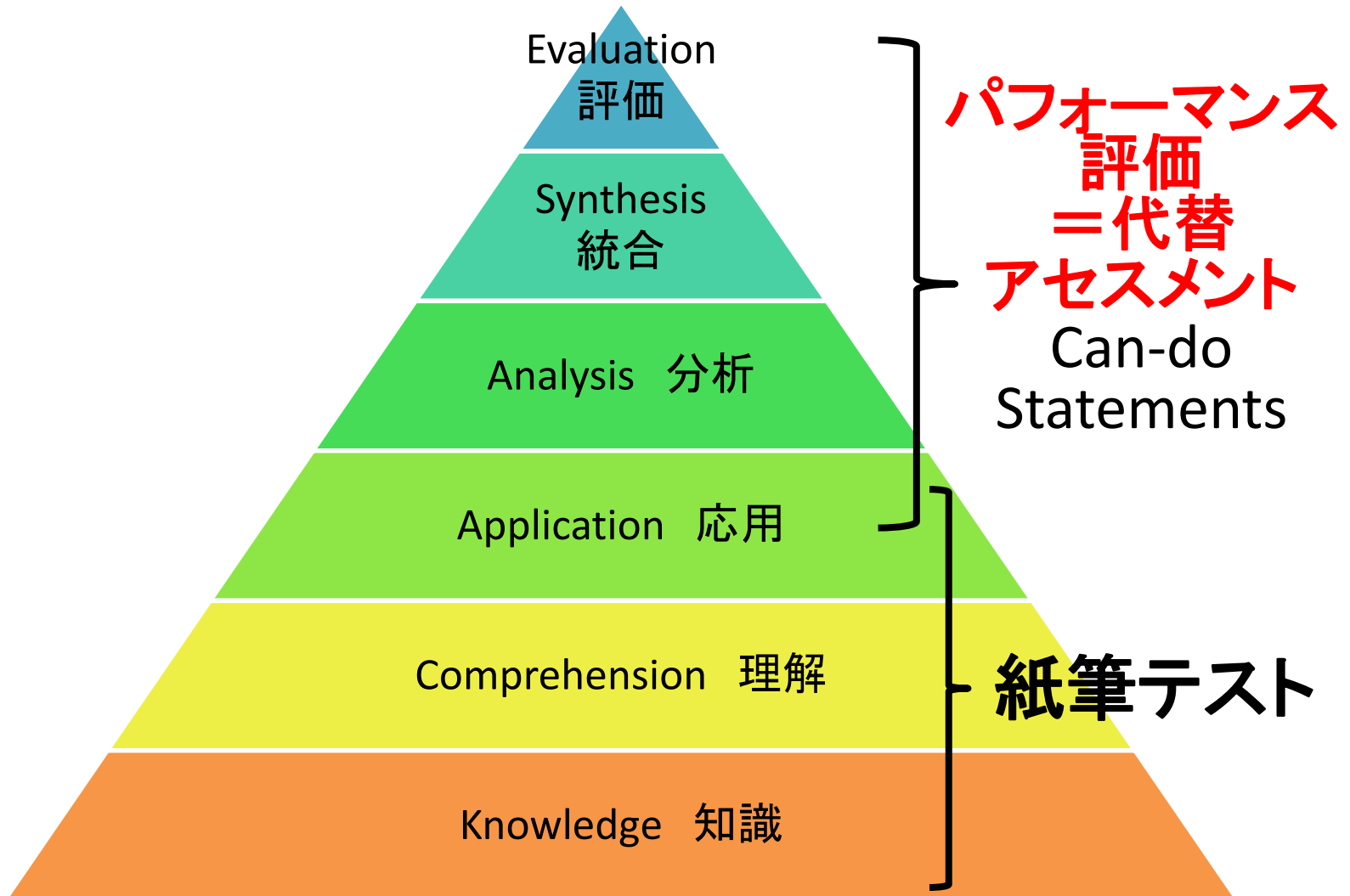


パフォーマンス評価

パフォーマンス評価 ＝代替アセスメント

- ジャーナル：学習者の思考過程や行動に注目するために、内省を中心としている。
- ポートフォリオ：言語活動を成果物化し、学習の発達段階や達成度を実感させている。
- ピアアセスメント：評価は教師だけという考えから離れ、学習者視点からの学習奨励や学習促進をねらいとしている。対話、協働活動。
- 自己評価：自己内省と自己評価を中心。

Bloom's Taxonomy



これからの日本語教育

■ 拡大化と多様化

- ① 学習者の学習機会の増加へ
- ② 教室環境から“ICT”環境へ
- ③ 個別機関から複数機関との連携・協働へ
- ④ 専門性・実践内容の明示化へ
- ⑤ 教育実践から教育推進へ

発題

- (1) どのように学習者に向き合うのか。
- (2) どのように言語習得・日本語学習をとらえるのか。
- (3) どのようにどのように
グローバル社会をとらえていくのか。
- (4) どのような日本語教育をデザインしていくのか。
- (5) その上で、評価をどうするのか。

【主な参考文献】

- 石井英真(2004)「『改訂版タキノミー』における教育目標・評価論に関する一考察」京都大学大学院教育学研究科紀要』第50号、pp. 172-185、京都大学大学院教育学研究科
- 佐藤慎司・熊谷由理編(2010)『アセスメントと日本語教育』くろしお出版
- ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク著、立田慶裕監訳(2006)『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして』明石書店
- ブルーム、B.S.他(梶田叡一、渋谷憲一、藤田恵璽訳)(1973)『教育評価法ハンドブック—教科学習の形成的評価と総括的評価』第一法規出版
- 文部科学省(2007)『言語力の育成方策について(報告書案)』言語力育成協力者会議
- Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge University Press. (吉島茂他訳(2004)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社)